

# CASA新聞

発行 株式会社カーザミカワ  
岡崎本社 ☎0564-24-2511  
岡崎市吹矢町88番地  
豊田営業所 ☎0565-28-3891  
豊田市豊栄町6丁目1番地

## 国産材製材、1割増産が限界 設備投資には長期安定需要が必須

輸入材の入荷減少と高騰を背景に、国産材への代替需要が急激に増加してきている。木材生産現場や国産材製材工場は増産を図ってきたが、不足感は今も続く。佐川広興国産材製材協会会長は、加盟工場を代表して「目いっぱい残業しているが、増産できる量は通常の1割程度。大幅に増産するためには設備投資が必要だが、すぐにはできない」と訴える。代替需要に伴う引き合い増加が出始めた時期は、関東など早いところでは3月中旬頃から、北海道など遅いところでは5月連休明け頃からと、地域によって多岐にわたる。現状、全国の製材工場が残業や土曜日稼働などで生産を増やしている。素材生産も、通常は伐採を控える5月以降も出材意欲は旺盛で、原木市場や共販所の入荷量は例年の同時期に比べて多い状況が4月以降続いている。選別が間に合わず、残業や土曜日出勤はもとより、日曜祝日も返上で仕分けに奔走する共販所もある。

国産材製材用丸太の工場への入荷量は近年、需要減少時は月間90万、100万立方、需要増加時は同100万、110万立方で推移してきた。需要が減少した昨年5月以降、同100万立方以下が今年2月まで続いたが、3月以降は同100万、110万立方を以て回復した。輸入丸太も含めた製材工場の丸太在庫は5月は前年比8.4%減と消化も進んでおり、丸太の入荷と製材量が需要増加時の水準に戻っていることが数字に表れている。素材生産は現在も活発で、製材工場への入荷量が同120万立方以上に乗る可能性がある。ただ、同130万立方以上になると、素材生産に必要な人手や機械、丸太を運ぶトラックの数が増えない限り難しい。機会はレンタルで増やすことも可能だが、トラックの新規購入には1年以上かかる。素材生産を行なう人材の育成は少なくとも半年は必要で、そもそも林業の就労希望者が増えないという根本的な問題がある。人手に課題があるのは製材工場も同様だ。働き方改革への対応もあり、残業時間の拡大や土日祝も稼働してさらに生産量を伸ばすとなると、シフトを組む必要がある。だが、シフトを組むだけの従業員数がある工場は少なく、募集しても中々集まらないという。設備投資をするにしても、一から製材工場を立ち上げるには丸太の調達手配まで含めると数年かかる。既存工場がラインを増設するのにも、既に計画されていたものであれば半年程度で稼働するが、今から発注となれば稼働までには早くとも1年近くかかる。なにより工場側は、設備投資の前提として、ここ3カ月の国産材製材への需要が、今後とも長期的に安定して継続するの確信が持たない限り決断できないという。過去幾度も繰り返された、需要の急増とその後の急減という苦い経験が、国産材の増産への姿勢を慎重にしている。

## 名古屋商況

木材の調達難は続いており、連続的なコストの上昇で需給は厳しい情勢だ。大型プレカット工場では受注時の条件を厳しくし、「入り」を抑制。材料確保が進まないことを懸念して7、8割稼働で運営している。川下では材料高で、建築を見送るケースも出ている。価格には一部で一服感が出ているが、強基調は変わらない。高コストの新材を扱いだせば販売に転嫁せざるを得ないため、軟化する展開は当面見込めない。輸入製品では、W・Rウッド集成管柱・平角は品薄で続伸し、間柱はほかKD小割材も調達が難しく、前月比1万、1万2000円高に。国産材も品薄感が強く、杉・桧製品ともに上昇。SPF2×4材は同2万円高だが、先物価格はさらなる高値到来を示している。東海4県の5月新設住宅着工数は7918戸（前年同月比21.8%増）、持ち家（注文住宅）は3176戸（同15.7%増）でいずれも2カ月連続で増加した。分譲住宅は2129戸（同15.1%増）で13カ月ぶり増。このうち、マンションは前年同月比17.3%増で、戸建ても同14.1%増といずれも健闘している。

## 前年比7%増水準で推移 6月の新設住宅着工


国交省は7月30日、6月の新設住宅着工を公表した。総数は7万6312戸（前年同月比7.3%増）と、4カ月連続で前年同月より約5000戸増加した。4月から、総数は3カ月連続で前年同月比7%以上増加している。ただ、2019年まで6月は8万戸を超えており、1、6月累計は41万2010戸（前年同期比3.3%増）で、この水準で1年を終えると年間着工戸数は約82万戸になる。総数が7万6000戸を超えるのは、19年10月以来1年8カ月ぶり。20年の月平均着工戸数は6万8000戸、21年1、5月の月平均は6万7100戸で推移してきたため、7万6000戸超は多く見える。ただ、21年4、6月の前年同月比の増加幅は7%超で推移し、需要期に入ったことで絶対数として増加した。コロナ禍に見舞われた20年よりは回復傾向にあるものの、年間着工戸数は最後に90万戸台となった19年（90万5000戸）の1、6月累計より8.5%減で推移している。持ち家は2万6151戸（前年同月比10.6%増）と8カ月連続で増加した。持ち家も2万6000戸を超えるのは19年7月以来約2年ぶりだが、こちらも需要期らしくなってきた。前年同月比で

4月8.8%増、5月16.2%増、6月10.6%増と、約10%増水準で推移する。ただ、それでも19年4、6月累計比では、8.6%減。21年1、6月累計は前年同期比7.7%増で推移し、貸家の同2.6%増、分譲の同0.1%増より増加幅が大きい。ただ、20年同期の減少幅も、持ち家が同13.8%減、貸家が10.8%減、分譲が8.9%減と、持ち家が一番大きかった。貸家は2万9802戸（同11.8%増）と、4カ月連続で増加した。2万9000戸を超えるのはこちら19年10月以来1年8カ月ぶりだが、17、18年のこの時期は3万5000戸を超えていた。貸家はまだまだ不安定感が強く、前年同月比で3月2.6%増、4月13.6%増、5月4.3%増、6月11.8%増と、増加幅に波がある。分譲は1万9877戸（前年同月比1.5%減）と、2カ月ぶりに減少した。マンションの着工が不安定で毎月増減を繰り返し、6月は7024戸（同16.6%減）と4カ月ぶりに減少した。戸建て分譲は1万2654戸（同8.5%増）と、2カ月連続で増加した。1万2000戸を超えるのは19年12月以来1年7カ月ぶりだが、21年1、6月累計は前年同期比1.4%増。


表示説明


値下げ 

横ばい 

値上げ 

市況状況

ラワン薄ベニヤ . . . . 

ファルカタ正寸12mm T2 . . . . 

針葉樹12mm 3×6 . . . . 



# 工場フル稼働で丸太需要増

## 21年上半期丸太需給

2021年上半期（1～6月）の丸太需給量は、製材用が815万5000立方尺（前年同期比4・3%増）、合板用が255万2000立方尺（同5・7%増）となった。輸入製品の入荷が減少したことで、国内工場の生産活動が活発化し、内外産丸太の需要が増加した。製材用丸太は国産材が前年同期比1・2%増、輸入材が同16・1%増と、輸入材の増加幅が大きく、そのため製材用丸太における国産材の割合は76・6%となり、20年比で1・6%低下した。

丸太需給量は20年4月以降、消費増税の反動減や新型コロナウイルスの影響で縮小し、その傾向は21年2月まで続いた。しかし、製材を中心に輸入製品の入荷減少に伴う木材不足が目立ち始め、国内工場への需要が急増したことで、工場の丸太手当も大幅に増加。3月以降の月間供給量は、製材用が140万立方尺前後、合板用が40万立方尺台となり、直近で需要が最も堅調だった19年水準に回復した。

21年1～6月の製材用丸太の供給量は国産材が624万8000立方尺（同1・2%増）、輸入材が190万7000立方尺（同16・1%増）となった。国産材丸太も同7万3000立方尺増となったが、近年減少傾向が続いていた輸入材丸太が同26万4000立方尺増と大幅に増えたことで、上昇一途だった製材用丸太の国産材率が低下した。輸入材丸太の増加は、大半を占める米材丸太が増加したためとみられる。一方、同1～6月の合板用丸太の供給量は、国産材が234万3000立方尺（同9・3%増）と増加する一方、輸入材は20万9000立方尺（同22・9%減）と減少し

材が190万7000立方尺（同16・1%増）となった。国産材丸太も同7万3000立方尺増となったが、近年減少傾向が続いていた輸入材丸太が同26万4000立方尺増と大幅に増えたことで、上昇一途だった製材用丸太の国産材率が低下した。輸入材丸太の増加は、大半を占める米材丸太が増加したためとみられる。一方、同1～6月の合板用丸太の供給量は、国産材が234万3000立方尺（同9・3%増）と増加する一方、輸入材は20万9000立方尺（同22・9%減）と減少し

# インドネシアで新型コロナ感染拡大

インドネシアの新型コロナ感染者が7月14日、5万4000人と1日の感染者としては過去最高を記録した。感染者に対する死亡率も急激に増加しており、ジャカルタを中心に合板や木材貿易、建材メーカー等の製造拠点を駐在する日本人に対し、管理のために避けられない場合を除いて、帰国を促す企業が相次いでいる。

貿易、管理実務者のほか、工場内従業員の感染者がある場合は、操業度にも影響するなど、今後の資材提供に少なからず影響を与えそうだ。

可能な限りリモートによる実務で対応するが、実際面で資材供給が不安定になることにより、代替資材への転換が進む可能性もあり、これまでの南洋材の資源供給問題に加え、現在の新型コロナウイルスの患者数の増加で、南洋材地域からの資材供給問題に本格的にメスを入れる時が来たと見る向きもある。

なかでも南洋材合板はマレーシア、インドネシアから年間150万立方尺が輸入されているが、代替できる分野が針葉樹合板や繊維板に限られている。製材フリー板など16万立方尺が両国から輸入されているうえ、そのほかの各種建材や住宅設備機器などもまだまだ南洋材諸国との業務が構築されている。資源問題とともに、感染拡大地域における継続的な業務のあり方について新たな視点を入れなければならぬ事態になっている。

# 生産上回る出荷、在庫減止まらず

## 国産針葉樹合板

国産針葉樹合板はメーカー在庫が低水準で推移するなか、生産量を上回る出荷が続く。品薄状態が続いている。さらに、合板用国産材丸太が製材集成材、輸出需要の活発化で西日本を中心にまとまった数量が確保しづらく、生産効率は伸び悩んでいる。加えて、丸太も高値が続く、接着剤価格も上がるなど生産コストは上昇している。

こうしたなか、国内合板メーカーは12、厚3×6判のメーカー建値を7月から引き上げている。低水準のメーカー在庫が続く背景には、昨年前半の減産体制から在庫が回復していないことがある。昨年3月にコロナ禍による市場の混乱から国産針葉樹合板の市中価格

が下がると、国内合板メーカーは減産体制に入った。その後、昨年6、7月頃に12、厚3×6判の市中価格が一時900円を下回る現物玉が出たことで、各メーカーは減産体制を強化した。このため、針葉樹合板の在庫量は昨年5月をピークに減少傾向に入った。その後、昨年後半から出荷量も改善したことで、各合板工場も減産体制を解除し、通常の生産体制に戻っていった。

ただ、昨年前半は国産材丸太も需要減により供給調整を実施していた影響から丸太の確保が進まず、生産量は期待されたほど伸びなかった。それでも、国内合板メーカーは2、3月には不要期に入るため、ここで在庫の確保が図れると考えていた。しかし、原木不足と冬場の乾燥効率の悪化、3月下旬の一部合板工場の火災による生産減により、生産量が思うように回復しなかったため在庫を積み増せなかった。

4月以降、構造用合板は直需・木建ルートとも堅調な引き合いが続く。当初は木材製品不足による受注制限で注文は減少すると見られていたが、先高観と供給不安から通常注文している分については注視されなかつた。プレカット会社が多かつた。さらに、針葉樹フロア合板も輸入南洋材合板

の供給不安から切り替え切り替える必要が活発化。最近では針葉樹塗装型枠合板の引き合いも伸び始めており、品目を問わず需要がおう盛になっている。

一方、在庫量は今年5月末時点で針葉樹合板が9万6300立方尺、うち針葉樹構造用合板は7万8200立方尺。出荷量が生産量を上回るなかでは各需要家の納期通りに配送するにはある程度在庫に余裕が必要だが、その余裕がない状態が続いている。

さらに合板工場の頭を悩ませているのが丸太と人手の問題だ。国産材丸太はまとまった数量の確保が難しい。

また、働き方改革関連法の施行で残業時間などの規制が強化され、人手のやりくりの問題から1日当たりの生産量も伸びしづらくなっている。

例年8月は各合板工場が生産設備の定期点検があるため1週間程度操業を停止する。しかし出荷は引き続き堅調と見られるため、しばらくは生産を上回る出荷が続くようだ。一方で、丸太や接着剤など原材料コストの上昇傾向は続いているため、市場では更なる値上げもあり得るとの見方も聞かれ始めている。

# 米材、欧州材とも値上げ続く

米材協議会名古屋支部は7月26日、名古屋木材会館で例会を開催し、需給や市況の動向などを協議した。木材製品の調達の情勢は依然厳しく、価格評定は丸太・製品とも値上げ基調となっている。

米材丸太は、供給減少により米松ではオールドグロスからJソルトまで軒並み前月比500円高の評定に。米ツガも不足感から選木・並材いずれも同500円高となった。米材輸入製品は、産地先物価格が下落したことを受けて様子見に転じた需要家もいるが、日本向けについては供給量が少ないため相場は軟化しておらず、むしろ新材には先高観が強いとされた。価格評定は、米松KDタルキ・根太は前月比1万5000円高。SPF2×4デイメンションラバーは産地価格が変化してきたが、同1万円高となった。米ヒバ士台も競合材とともに値上がりが続く、同2000円高に移行した。欧州材製品も強基調が続く、Wウツドのソリッド間柱と集成間柱は同5000円高、集成管柱3×105、角は1本代金で同2000円高の続伸。このほか、国産材では杉間柱が1万円高、桧KD土台が同3万4万円高に。ロシヤ材の赤松現地挽き及び国内挽き製品も同1万5000円高と値上がりが続く。

強いとされた。価格評定は、米松KDタルキ・根太は前月比1万5000円高。SPF2×4デイメンションラバーは産地価格が変化してきたが、同1万円高となった。米ヒバ士台も競合材とともに値上がりが続く、同2000円高に移行した。欧州材製品も強基調が続く、Wウツドのソリッド間柱と集成間柱は同5000円高、集成管柱3×105、角は1本代金で同2000円高の続伸。このほか、国産材では杉間柱が1万円高、桧KD土台が同3万4万円高に。ロシヤ材の赤松現地挽き及び国内挽き製品も同1万5000円高と値上がりが続く。